

ルデレはラテン語で、遊ぶ、演奏する、語る、楽しむなどを意味することばです。  
ギターを手に心を語り、クリエイティブに音楽表現を楽しむ、そんな想いが込められています。



一音一音を楽しんで。

## 特別対談 Part1

山口修氏 × 山下光鶴院長

レッスンクローズアップ  
はじめての作曲ワークショップ

寄稿「私とギター」

コンサートレポート

ジュニアアンサンブル紹介 ほか

## ■ごあいさつ

大きな変化の重なった一年を終え新たな年を迎えましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか？長崎ギター音楽院は新体制になって、はや半年。曲の持つストーリーをじっくり読み解いてみたり、身体の使い方を細かく意識してみたりと、新たな視点も取り入れながらの音楽へのアプローチを続け、サロン会や音楽院ライブでは、自作曲の発表も恒例となりつつあります。新しい気づきやアイデアが弦に響くまでには、時に長い時間がかかりますが、焦らずに一音一音を楽しみながらの音楽作りを心がけたいですね。また、ギターはじめての方のための「やさしいギター講座」が長崎に続いて大村でもスタートするなど、ジュニアも含めて新メンバーが増えつつあります。引き続き生徒大募集中です！

## 特別対談 Part1

# 山口修氏 × 山下光鶴院長

山下亨前院長の愛弟子で、国際的に活躍し、また長崎でのギター音楽の普及に尽力してきた長崎ギター音楽院出身のギタリスト・山口修さん（以下、山口）と山下光鶴院長（以下、山下）が対談を行いました。



山下：2020年は世界の様相が大きく変化し芸術活動にも大きな影響があったと思いますが、山口さんの近況はいかがですか？

山口：まず太りましたね(笑)。レッスンはほとんどキャンセルになり、公民館などで行っていたギターサークルも活動休止、年間100本以上あった公演予定がほぼすべてキャンセルになってしまいました。「ギター4大協奏曲を弾く」などのコンサートも、残念ながらピアノと合わせることもないまま中止となりました。何もしない日が続く、料理などして気を紛らわしたりしていましたが、はじめのうちは気が落ち込み、なかなかギターを弾く気にもなりません。

しかし、しばらくするとロマニロス（注：スペインの著名なギター制作家）のギターが手元に送られてきたのですが、この楽器が名器のほずなのに、最初まったく鳴らなかつた。それで、こんなはずはないと思ってひたすら弾き込み、日に日に楽器とのやり取りに夢中になり、至福の時になりました。この歳になって、ギターとの出会いがコロナ禍の自分の大きな力になりましたし、恩師山下亨先生から「いつも何かに挑戦し葛藤し、しっかりと哲学を磨きなさい。」この言葉が脳裏に浮かび、少しずつ気分も持ち返すことが出来ました。

その後は、生徒も1人づつ戻ってきて、サークル活動も広めの会場を使うなどして段々に再開できるようになりました。活動中断が明け久々にメンバーと会いびっくりしたことが、皆さんの表情が以前とは変わり生き生きとして、皆さんの心の中の音楽の価値が素晴らしく上がっていました。演奏活動にしても然り、演奏者の必死の想いとお客様の心からの柔らかな空気が一緒になって、今までにない感動でした。自分のような演奏で皆さんが涙してくれる、皆がピュアな時を迎えていると思いました。

山下：僕は当時まだドイツにいたのですが、急に数カ月の予定が大きく空いたのは、僕にとってもとても新鮮な感覚でした。創作などやろうと思っていて出来ていなかったことに取り掛かれるというポジティブな時間でもあったのですが、普段動き続けていたサイクルが停まったことが自己の活動を見つめ直すきっかけになったと言うのか、一度立ち止まって、それぞれの活動のあり方を再考する時間でもあったと思います。もちろん、生活をつづけるためにそんな余裕はないというジレンマを抱えながらですが。

「変化」といえば、コロナウイルスの問題に限らず、AIによる技術革新などが相まってこれから社会が大きく変わってくる。そんな中で、人々が物事の価値や意義を問い直すことになるとは思います。その流れのなかで音楽活動は、いわゆる「効率化」などとは違った価値観のなかにあるものとして大きく社会からも期待されるようになるのではとも考えました。「人々がピュアになった」というのは、そこにもつながっていくかもしれませんね。

山口さんは、これまでに長く音楽と関わってきた中で感じている、人と音楽の関わりの変化のようなものはありますか？

山口：人たちの心は今も変わってないけれども、我々も含めて音楽へ

のアプローチの形は少し違ってきていると思います。「ギター美」を感じるだけの姿勢から、「音楽と人」を純粹に聴き楽しむお客様が増えたようです。合奏団（現・長崎ギターオーケストラ）にしても、以前は「ギターで弾いている」というも物珍しさが結構あったのが、今は一つの音楽として演奏を聴いてもらえるようになったんじゃないでしょうか。それは、とてもポジティブなことだと思いますね。ただギターの「珍しさ、特別さ」みたいなのがなくなると同時に、ギターへの没頭というか、憑りつかれたような情熱というのはもしかしたら薄れてきているのかもしれない。例えば僕なんかソロ演奏をはじめた時とか本当に興奮してたんです。弾いていて、そのエネルギーというか響きというか、「ギターってすごい！」と感動に浸っていました。テクニックは二の次がむしろに弾いて弾いて、・・・音楽院でのサロンコンサートでは失敗してしまうのですが、毎回燃えて向かってました。ギターを手にする皆さんに子供たちに伝えたいこと、ギターを弾いてぞくぞくワクワク熱くなる経験をたくさんされて、ギターの素晴らしい演奏の楽しさに味わって頂きたい。そこにギターを続ける原点があると思います。

山下：確かに色々なものにアクセスしやすくなった今日、「濁っている」という感触が違うかもしれませんね。それに関連して思うのが、教えていると何が正しい弾き方なのかと気にする生徒さんが結構多いように感じるのですが、音楽というのは正しいとか間違っているとかではなくて、自分が楽しくのびのびと弾ければいいと思うんです。こう弾きたいという想いがあれば、癖があっても技術が足りなくてもパッションほどばしる演奏に引張られて音楽が躍動してくる。個々人にあるエネルギーと個性を信じてほしいですね。そして、僕たち自身もそんな演奏を届けたい。はじめて聴く人たちには、こういう世界があるんだという感動を伝えられればと思います。

山口：光鶴さんにはこれまでに積み重ねてこられた、オリジナリティーの高い演奏と作曲に大きい期待を寄せております。一回一回の演奏させてもらえる機会がありがたみを感じて、夢のある演奏を届けられたらと思いますね。そういう意味も含めて、光鶴さんには作曲なんかもどんどん広めていってほしい。

山下：いまの音楽界は競争重視のピラミッド構造のようになって創造性が大きく委縮している傾向にあると思いますが、そこに一石を投じていきたいですね。そして、個性に加えてあるのが地域色というのでしょうか、ローカルな規模で真摯に人と音楽と向き合い、そこから生まれてくる特色というのも大切にしていきたいです。

山口さんは大きく成功されてからも拠点を移さずに長崎での活動を重視されてきたと思いますが、その理由とか、あとは長崎の変化として感じていることはありますか？

山口：長崎は人情味を感じる、遊び心のある街。私が初めてヨーロッパでたどり着いた南仏のアルルの町とも似ていて、長崎なら自分らしい活動ができると確信しました。町中に音楽が響く環境を創りたいと今なお努力しております。ラテンの世界には私など分かってない人間にも、身体と心を躍らせます。生活の中に根付かせることは大切ですね。長崎の変化というのは多くあるだろうけど、ギターを生で楽しめる場が減ったというのが一つありますね。以前は長崎でも流しの音楽家が何人もいた。フォークギターでギターブームが開花した頃は、白いギターがはったりとか。平和公園あたりには、人々が集まってギターを弾くような広場があったりもしました。以前スペインにいた際なんか、街中で音楽を奏でているような風景があって、とても素敵だなと思いましたね。

ギターは昔から、寂しがり屋が一人ぼっちで個室で弾いてる性格が

あったり、一方でラテンなんかはその逆で、人を踊らせて、歌わせてという楽しみがある。ギターを弾いたり、聴いたりする機会がどんどん増えたらいいと思います。

山下：そうですね。南米のフォルクローレなんかも各地域で個性的なものがコミュニティの中で響いていて、その深みを地域全体で育てているような感じがある。いろいろな形を参考にして試行錯誤を続けて、かけがえのない音楽活動を作り上げていきたいですね。2021年は、いろいろな音楽団体を招待して合同演奏会など、ギターに限らず広く人を繋げる方向に盛り上げていきたいと思っています。

山口：人とつながってこそ音楽の価値ですからね。僕らが情熱を持って一緒にがんばり続けていけたらと思います。

(次号へ続く)

次号では、山下亨先生との思い出や長崎ギターオーケストラ(旧・長崎ギター合奏団)への想いについてお聞きます。

### 【山口修氏プロフィール】

山下亨、小船幸次郎、ホセ・トマス、アリリオ・ディアスの各氏に師事。スペイン、イタリア、フランス、ヴェネズエラの国際ギターコンクールで優勝。多くのオーケストラと共演し、中でも日本フィルハーモニー交響楽団とは国内、ヨーロッパ公演に至る約80会場を回る。CD「山口修/シャコンヌ」はレコード芸術特選盤となる。

長崎記念病院「さわやかコンサート」は300回を超えた。FM長崎「日曜音楽館」パーソナリティ。平成音楽大学非常勤講師。九州ギター音楽協会会長。

## 寄稿「私とギター」

長崎ギターオーケストラ 河本修一さん



小学生時代、父が古賀メロディーをよく弾いていてギターは身近な存在でした。中学生の時、ギターの上手な人が家に来て、「禁じられた遊び」を弾いてくれて、すっかり魅了され、楽譜もないのに、手取り足取りで教えてもらい、この一曲だけ練習していました。高校生時代は、スポーツに明け暮れ、ギターはたまに触る程度でしたが、学生時代、大きな出会いがありました。

1) セゴビアのレコードとの出会い

クラシックギターの素晴らしさ、音の美しさに感動、ギター音楽への門戸を開いてくれ、練習に励みました。

2) サビーカス(フラメンコギター奏者)との出会い

どうやって弾いているのかわからないラスゲアド、コンパスの正確さ、美しい数々のファルセータを聞いて、二刀流はダメとは思いましたが、ハマり込みました。

3) パコ・デ・ルシアとの出会い

フラメンコギターは、サビーカスやリカルドが一番と思っていたのが吹っ飛びました。ハートを掴むような、シャープでパンチのある音、独創的で官能的なファルセータ、超絶的なテクニックとスピードにKOされ、のめり込みました。当時は、フラメンコのレコードはほとんど無くて、苦労しました。

社会人となってからは、仕事とスポーツに忙しく、ギターから30年以上遠ざかっていましたが、ただ、35才位の頃、素晴らしい出会いがありました。それは山下和仁さんのコンサートで「展覧会の絵」全曲を聞いた時でした。衝撃を受け感動し、改めて「ギターは小さなオーケストラである」ことを再認識させられました。いつかは、ギターをやり直そうと、心に誓いました。

60才(還暦)を迎え、仕事にも余裕が出来たので、ギターの基礎からやり直そうと、練習を再開。65才で仕事をリタイアして長崎に戻りましたが、独学に限界を感じ、遅いとはわかりつつも、山下亨先生の音楽院の門をたたきました。初見が苦手で、リズム感も悪く、合奏団の足を引っ張ってばかりでしたが、ある日、研究会で恐る恐るフラメンコの曲を弾いたところ、先生から「フラメンコも立派な音楽。どんどん弾いていいよ」と言われ、ホッとして二刀流を続けています。

ただし、冥土の土産は無謀にも「シャコンヌ(バッハ)」をと決めています。

## レッスンクローズアップ

# はじめての作曲ワークショップ

さる11月22日(日)に開催された「はじめての作曲ワークショップ」は、演奏家はもちろん作曲家としても国際的に活動してきた長崎ギター音楽院院長、山下光鶴氏が講師となり、「作曲なんて無理!」と思っている人必見、誰もが楽しく作曲を体験できる」をコンセプトに開かれました。大村や愛野で先行して開催されており、多くの人から好評を得ているものです。今回、会場となった長崎ギター音楽院サロンには、年齢も職業も様々な7名の参加がありました。

まず初めに、「作曲とは?」という問いから始まり、それぞれが持っている「作曲」に対するイメージについて意見交換。次に、絵画や映画などを例に、クリエイティブなプロセスとはどんなものかを考えながら、作曲家が実際どのように曲を作っているのか、歴史やジャンルごとの違いを踏まえながらも学びました。

そこから、今回のメインである実際に自分の手で作曲する実践に移り、もっともスタンダードな作曲の道、「和音にメロディーをつける方法」を学びました。コード進行=シナリオをもとに和音を構成している音を使ってメロディー=セリフを創ってゆくのです。もちろん同時にリズムも考えます。

「ノクターン(夜想曲)を作曲しよう」というテーマのもと、ワークシートにはコードネームだけが書かれた音符のない16小節の五線譜が添えられています。各々自由にコードの和音を頭に思い浮かべながらの作業です。初めは大まかなリズム=アウトラインで構成するのがコツだとか。

ちょうど15分ほどで、簡単なメロディーが一応出来上がったところで、それぞれのメロディーの中間発表を行いました。皆さん、意外にもオリジナリティーのある曲になっていました。その後、光鶴先生よりメロディーやリズムに変化をつけたり、装飾をつけたりする方法のレクチャーがあり、最初のシンプルな曲がかなりグレードアップしてゆくの自分でも意外であり、とても面白くなっていきました。しまいには、これが本当に自分で創作した曲なのかと、感動すら覚えるのでした。ワークショップ終了間際に再びそれぞれが作曲した自作の曲を自ら演奏し、それを聴いて様々な反応をしてくれる参加者の声に励まされながら、「作曲って楽しいな、今度はどんな曲を作ってみようか」と独り言をつぶやいたのでした。光鶴先生の次の『作曲講座』はいつなのか、胸をワクワクさせて待っています。



## コンサートレポート たんぽぽ発表会 (12/26)

たんぽぽサークル・冬の発表会～大村ギターアンサンブルをゲストにお招きして実施しました(12月26日@時津カナリーホール)。無観客での実施となりましたが、お互いに練習の成果を発表し刺激を受ける良い交流の会になりました。「コンドルは飛んでいく」で幕を開け、ラテンフォルクローレ、クラシックからフォークソングまで盛りだくさんのプログラム。高校生から80代の新人さんまでが思い思いの曲を披露し、中には「スカーボローフェア」(英語)や「はなまつり」、「光の天使」などラテンの歌、スペイン語の弾き語りもありました。「歌う心」を持って、2021年も大いにギターと音楽を楽しみましょう!



▲新人の立山さん(右)、「河は呼んでいる」を演奏されました。

## ウインターシーズンの 主なイベントスケジュール

日付	時間	イベント
1月10日(日)	14:00～	サロン会
1月17日(日)	10:30～	やさしいギター @とるーす(東大村) スタート
	16:00～	ラテンアンサンブル @とるーす(東大村) スタート
1月21日(木)	14:00～	音楽院ライブ
1月24日(日)	14:00～	作曲ワークショップ@愛の夢未来センター
1月30日(土)		長崎ギター音楽院ビデオ収録会(無観客での実施)収録した映像が長崎ギター音楽院公式YouTubeチャンネルで公開されます。
1月31日(日)	18:00～	小さな音楽会: 山下光鶴ギターリサイタル
2月14日(日)	14:00～	サロン会
2月18日(木)	14:00～	音楽院ライブ
2月23日(火・祭日)	14:00～	”たんぽぽ&コンドル”サークル発表会
2月28日(日)	18:00～	小さな音楽会: 山下光鶴ギターリサイタル
3月5日(金)	18:30～	長崎ギター音楽院第102回定期演奏会 in 長崎市民会館
3月14日(日)	14:00～	サロン会
3月18日(木)	14:00～	音楽院ライブ
3月21日(日)		長崎ギターグランプリ (無観客での実施)

各イベントは新型コロナウイルス感染拡大の状況に鑑み、中止や延期になる可能性があります。

## 長崎ギター音楽院アンサンブル紹介

## ジュニアアンサンブル

ジュニアアンサンブルでは、子どもたちに「クリエイティブにのびのびと音楽を楽しんでほしい」という想いでレッスンをしています。オリジナルの教材は、ウルグアイやペルー、ドイツなど世界各国の音楽文化を取り込んだもので、「広くて自由な音楽の世界をギターを通して探検する」をコンセプトに作っています(イラストは、佐藤さん!)。ギターも弦を弾くだけではなく、叩いたりこすったりなどのパーカッション奏法も豊富に取り入れながら親しみ、また音楽の基本である歌うこと=弾き語りにも重点を置いています。毎回90分、ほぼ休憩もなしに続けてのレッスン、子ども達の集中力と感の鋭さに驚かされつつ、音楽の楽しさを教える側も実感します。これからさらにいろいろな曲と奏法を習得しつつ、作曲やアドリブも充実させていく予定、先が楽しみです!



## お知らせ

### ●ギター短歌・川柳募集中

LUDERE次号へ向けたギター短歌・川柳募集がはじまりました!皆様のたくさんのご応募をお待ちしております(長崎ギター音楽院ウェブサイトまたは所定の用紙から応募できます)。

### ●第102回定期演奏会開催決定!!

コロナウイルスの影響で延期が続いていた長崎ギター音楽院第102回定期演奏会を3月5日に満を持して開催します!

バッハ、モーツァルトから、「剣の舞」、「亡き王女のためのパヴァーヌ」、さらに「はなまつり」、「コーヒールンバ」などエネルギッシュなラテンの曲たちを、ギターオーケストラならではの多彩な表現でお聴きいただけます。演奏者一同、精一杯演奏いたしますので、皆様ぜひご来場ください。尚、演奏会はコロナウイルス感染拡大防止のため入場人数制限、検温などを行って開催します。

日時: 2021年3月5日(金) 18:00開場 18:30開演

場所: 長崎市民会館文化ホール

入場料: 1,000円 お問合せ: 095-823-2766



〒850-0035  
長崎県長崎市元船町7-4 松永産業ビル2階  
TEL: 095-823-2766  
<https://www.nagasaki-guitar-academy.com/>

長崎ギター音楽院会報誌 Ludere

発行日: 2021年1月5日

発行: 長崎ギター音楽院

STAFF

監修: 山下光鶴

編集長: 池浦恒信

編集・デザイン: 内村灯

